

<追悼・西澤正樹先生>

現場主義とロマンの精神

～西澤正樹先生のアジア研究とアジア教育～

石川 幸一（前アジア研究所長）

西澤正樹先生は2021年9月6日に逝去された。西澤先生とはアジア夢カレッジをともに担当し、研究室が近く夜のお酒をご一緒することも多く、思い出は尽きず、寂しい限りである。アジア研究とアジア教育に全身全霊打ち込んだ西澤先生を悼む適当な言葉が見つからないので、西澤先生の没後に脳裏に浮かんだ李白の絶唱を記したい。

明月不帰沈碧海

（明月は帰らず、深い海に沈んでしまった）

白雲愁色滿蒼梧

（白い雲とかなしみの色が、蒼梧の海に満ち渡たる）

西澤先生は亜細亜大学の代表的な教育プログラムであるアジア夢カレッジを育て上げるのに絶大な貢献をされたことは周知のとおりであるが、同時にアジア研究者として大きな業績を上げられたことを忘れてはならない。西澤先生のアジア研究の特徴は現場主義を貫いたこととロマンを求める精神を失っていなかったことである。

西澤先生のアジア研究は幅が広いが次の4分野に大別できる。①中国の辺境地域経済研究、②中国の地域・都市の産業研究、③モンゴル研究、④日本のアジア進出中堅企業の研究である。

西澤先生が訪れフィールドワークを行った中国の地域は多い。中国の辺境地域経済研究では、①内蒙古自治区呼倫貝爾市、②雲南省昆明市、西双版納自治州、③広西壮族自治区崇左市、欽州市、防城港市、④黒竜江省・綏芥河市、黒河市をとりあげて亜細亜大学アジア研究所紀要に4回にわたり、論文を執筆している。それ以外に西澤先生がフィールドワークを行った地域・都市は多い。重慶直轄市、成都市、綿陽市、徳陽市、中国北端・漠河県、東端・撫遠県、内蒙古自治区・二連浩特市、延辺朝鮮族自治州渾春市、黒龍江省哈尔滨市、齊齊爾濱市、佳木斯市などについての論文が執筆されている。中国の地域経済・都市の産業研究では、北京市の先端産業政策とインキュベーター、大連市の金型メーカー、大連市の基盤技術集積と地域産業政策、雲南省の花卉産業などが取り

上げられている。

フィールドワークの成果は、毎年のように詳細な論文として発表されてきた。たとえば、中国「辺境」の地域と経済（4）～黒竜江省・綏芥河市、黒河市～は、全体で86頁、多くの地図、図表、写真、インタビューの成果を掲載した詳細な報告である。西澤先生の中国地域経済研究は、多くの文献、統計、資料に基づいているが、最大の特徴は西澤先生が現地を訪問し、政府機関、企業などのヒアリングを行い、工場や農場など現場を自分の目で見、話を聞き、その成果を分析・総合した「現場主義」の見事な成果であるということだ。目で見、耳で聞くだけでなく、中国の企業人、日系企業関係者と議論をし、食事をともにし酒を飲むという、五感をフルに使って調査をした成果である。

このような精力的なフィールドワークを西澤先生は毎年8月後半に行っていた。前期の授業が終わり成績評価を行うとアジア夢カレッジの大連留学インターンシップ壮行会が行われた。その後「合宿」と呼ばれる、1年生の2泊3日の日本の地域産業集積地でのフィールドワークを行い、夢カレ担当教員の夏休みは始まった。西澤先生は「合宿」を終えるとすぐに成田に向かい、2週間程度の中国でのフィールドワークに突入していたと記憶している。

アジア夢カレッジで極めて多忙な中、フィールドワークに基づく論文を毎年執筆するのは極めて大変だったと思う。旧1号館の研究室で夜遅くまで研究をされていた（時には徹夜をされていた）西澤先生の姿が脳裏に浮かぶ。

モンゴル研究は、「モンゴル/市場経済下の企業改革」（新評論）という大著を関教授との共著で刊行され、モンゴルの経済や産業についての論文を数多く執筆している。また、経済産業省の「モンゴル産業発展可能性調査」の委員やモンゴル商工会議所の日本地域顧問を務めるなど政策やビジネス交流でも貢献されていた。亜細亜大学のサークル「モンゴル研究会」の顧問としてモンゴルに関心を持つ学生の指導にも当たっていた。

アジア進出日本企業、特に中堅企業の研究でも多くの

業績をあげておられる。「日本企業の東アジア進出」、「東アジアにおける日系中小機械工業のグローバル経営と地域工業」などの論文のほか、アジア研究所所報に国際中堅企業の登場というタイトルで32回にわたり、グローバル化を進める日本の中堅企業の最新の姿を現場の取材に基づき報告したことが特筆される。この貴重な連載を本にまとめることを勧めたが、実現できなかったことは残念である。

現場主義とアジア夢カレッジ教育

徹底した「現場主義」に基づくアジアでの産業や企業のフィールドワークの経験や手法は、夢カレッジでの教育にフルに活用された。前述の「合宿」は猛暑の中、日本の地域産業集積地で市役所や企業訪問を2泊3日のスケジュールで行うもので1年生が参加していた。私も担当教員として参加し、諏訪、上田、飯田、太田、いわき、桐生などを訪問し、多くの企業を訪問させていただいた。学生は工場など生産現場を訪れ、担当の方から生産や経営の話の伺い、市役所で地域活性化の政策の説明を受けた。事前に調べたうえで生産現場でノートを片手に説明を聞き、質問を行う。フィールドワークノートをもとに後期にレポートを執筆するため学生たちの目は真剣そのものだった。学生たちは2年の大連での留学・インターンシップでも研究テーマを追求し、さらに卒論に結実させていった。1年生のうちに「現場主義」で鍛えられた学生は、その後大きく伸びたと思う。

西澤先生は地域活性化や地域再生でも大きな役割を果たしてこられた。西澤先生は、日本の地域産業、中小企業のアジア進出などの実証研究で著名な関満博教授の高弟であり、西澤先生自身が日本の地域創生の現場に指導者として関わってこられ、地域創生の先駆者としても高く評価されていた。西澤先生が就かれた地域活性化に関する役職(全てでなく例である)は次の通り多様であり、多大の社会的貢献、地域貢献をされたことを忘れてはならないだろう。

①厚生労働省「地域雇用開発支援ワーキングチーム」委員長、②諏訪大連会顧問、③大田区「機械工業発展に向けた中国企業との連携のあり方調査」検討委員会委員長、④雇用情報センター「中小企業における技能継承者等の人材確保・養成に関する調査研究会」委員、⑤海外職業訓練協会「海外日系企業が直面する問題に関する調査研究員会」委員、⑥相模原市「企業立地等審査会」委員、⑦東京都「中小企業振興対策審議会」委員、⑧埼玉県「経済振興プロジェクトチーム」委員、⑨三鷹市「まちづくり推進委員会」委員。

こうしてみると、アジア夢カレッジの学生は日本とアジアの経済や産業、企業の現場、地域の政策を熟知した西澤先生から直接学ぶことができたのであり、その価値は卒業後にアジアとのビジネスの現場に入ると実感でき

るだろう。

西澤先生は「現場主義」に基づいたアジア(とくに中国)の経済、産業、企業の実証研究で大きな成果をあげられたが、同時にロマンの精神を持っていた。モンゴルや新疆ウイグル自治区など辺境に強い関心を持ちフィールドワークを行っていたこと、愛読書にヘディンなど西域関係の書物を挙げられていたことや西澤先生との語らいから感じたことである。「好奇心」、「未知へのあこがれ」と「現場への行動力」を常に持ち続けたことが西澤先生の「魅力」と「幅の広さ」の源泉となっていたように思える。

アジア研究所と亜細亜大学のアジア研究、アジア教育の発展に貢献された先生方はこの数年、相次いで幽明境を異にされた。木村哲三郎先生、友田錫先生、高殿良博先生、野副伸一先生、そして西澤正樹先生である。誠に残念であり寂しい限りである。心からご冥福をお祈りしたい。